

2013年11月3日 主日礼拝説教（要約）

聖書 ルカによる福音書 1：39～45

「信じる者の幸い」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

天使から受胎告知を受けたマリアの恐れと不安はどれほど大きなものであったでしょうか。彼女は急いでエリサベトに会いにユダの山里に出かけます。なぜなら、天使が戸惑うマリアに「あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに。もう六か月になっている。神にできないことは何一つない」（36節）と告げたからです。ナザレの町からユダの山里の町までは、3、4日かかる距離で、危険を伴った相当きつい旅であったはずですが、けれども、マリアは誰と会うよりも、まずエリサベトに会わずにおれませんでした。

マリアが無事にユダの町に着き、ザカリアの家でエリサベトに挨拶したとき、それを聞いて、その胎内の子がおどったとあります。エリサベトも「あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました」と言っています。この41節と44節で「おどる」と訳された言葉スキルタノーは、新約聖書ではここ以外にあと一回使われているだけですが（ルカ 6：23）、旧約聖書のギリシア語訳では、メシア到来の喜びについて語るマラキ書 3：20 で使われています。「しかし、わが名を畏れ敬うあなたたちには義の太陽が昇る。その翼にはいやす力がある。あなたたちは牛舎の子牛のように踊り出て跳び回る」。エリサベトの胎内での洗礼者ヨハネの動きは、マラキが告げる救い主の到来を知る喜びの飛び跳ねだったのです。

その胎動に促されるように、エリサベトは聖霊に満たされて、声高らかに歌います。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう」（42～43節）。エリサベトがマリアからやがて生まれ出る子を「わたしの主」と呼ぶのは、すでにキリスト教的な信仰告白です。そして、「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう」とエリサベトが言うように、マリアの幸いは「主の母」という特別な地位や身分にあるのではなく、彼女が主の約束の言葉を信じ、主の御業に委ねきったところにありました。

このエリサベトの祝辞は、世間の誰からも理解されず、見捨てられ、孤立してしまうかもしれないマリアにとって、どんなに大きな励ましであったことでしょうか。主なる神さまは、先に選んだザカリアの妻エリサベトを通して、若いマリアを支えられたのです。

ところで、昔から多くの人々は、神の祝福を受けた二人の女性が、互いに挨拶を交わして喜び合う姿に教会のあるべき姿をみてきました。二人は神の不思議な選びと導きをいただいた者として、互いの幸いを確かめあっています。そこでは神の恵みが共鳴しているのです。教会の集まりとはそういうものではないでしょうか。教会は神に呼び集め

られた者たちが、与えられた祝福を共に集まることの中で確認し分かち合うところです。一人一人についてみれば、お互いさまざまな弱さと欠けを持つ者たちですが、それを包んでなお余りある神の恵みをほめたたえ、信仰をもって立ち上がっていくのです。このあと、マリアは主を讃美しますが、彼女は一人では歌えなかったのです。エリサベトとの交わりの中で、力強い神讃美の言葉が彼女の口をついて出てくるのです。讃美歌とは、教会の交わりの中で生まれ出る歌なのです。

ところで、洗礼者ヨハネはこのように「母の胎にあるときから」救い主を証ししましたが、「母の胎にあるときから」という言い回しが、聖書では実に多くの場所で用いられていることに注目したいと思います。詩編では「母がわたしをみごもったときから」、「母の胎にあるときから」、「あなたに依りすがって来た」(22:11、71:6)と歌われ、主の僕は「主は母の胎にあるわたしを呼び、母の腹にあるわたしの名を呼ばれた」(イザヤ 49:1)と言っています。預言者エレミヤを召し出された神は、「わたしはあなたを母の胎内に造る前からあなたを知っていた。母の胎から生まれる前に、わたしはあなたを聖別し諸国民の預言者として立てた」(1:5)と語りかけられました。そして、パウロは自分自身のことを振り返って、「わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神」と言っています(ガラテヤ 1:15)。

このような言い方がなされる時、これらの人々はすべてが生まれる前から自動的に、機械的に、無意識的に信仰者となり預言者となり使徒となったのかというと、決してそうではありません。エレミヤも人生の途上で召し出され、パウロの前半生は、ユダヤ教徒として激しくキリストに反発してきたのです。いや、洗礼者ヨハネも、荒野に出て預言者活動を始めるのは、その生涯の終わり近くであり、彼自身、主イエスが自分の前に現れるまで「この方を知らなかった」(ヨハネ 1:31)と言っています。

つまり、聖書は私たちの生涯全体を見て、本当にキリストに出会い、キリストを喜び、キリストを証したときに、たとえそれが人生の晩年であり、わずかな時間であったとしても、神の先立つ選びによることであって、実は、「母の胎にある時から」選ばれていたのだということです。そう言わずにおれないのです。救い主キリストに出会った私たちは皆、不思議にも「母の胎にある時から」選び召されて今日こうしてあるのです。それならば、洗礼者ヨハネの胎動のように、私たちも喜び飛び跳ねることができるのではないのでしょうか。そして、私たち自身も、「母の胎にいた時から、主を証しし、喜んでいたので」と言いたくなるような、あるいは、言われるような信仰の歩みを全うしたいものです。